

モードは語る

中野 香織

男性は迎合、女性は忖度

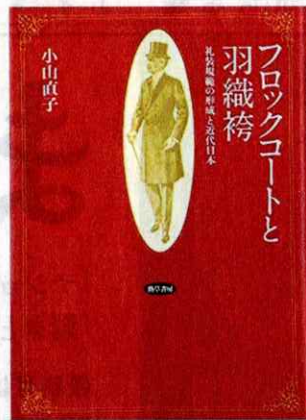
一般社団法人日本フォーマルウェア文化普及協会が顧問を務めることになり、現状のフォーマルシーンで見られる日本特有の慣習を洗い出してみた。不思議な慣行の一つに、男女カップルの礼装における和洋混合がある。男性がモーニングコート、女性が裾模様つきの紋付き留め袖で結婚式の媒酌人を務める光景は、奇妙なのに、格式高い礼装とされている。

この不思議な礼装はいかにして定着したのか？ 起源を明らかにする学術書に出合った。小山直子著「フロックコートと羽織袴 礼装規範の形成と近代日本」（勁草書房）である。明治新政府が布告した新服制が、どんな性格のもので、い

礼装の和洋混合

かなる過程を経て普及したのか。なぜ、一般の女性の礼装は白襟の裾模様つき紋付きの着物なのか。当時の新聞や書物を検証し、国民国家の形成と礼装規範の連動を明らかにする 350ページ近い大著だ。

精密な議論の過程を断腸の思いで割愛し、要点を抽出させていただくと、こんな情景が浮かび上がる。明治5年（1872年）、衣冠直垂に代わり、通常礼服として燕尾（えんび）服が、通常服としてフロックコートが、明治新政府によって制定される。とはいえ多くの官吏にとって燕尾服の調達は困難で、フロックコートが「換用」される。ちなみに礼服には「天皇に拝謁する際の装束」との意味が潜む。



折衷型の日本の礼装の不思議の謎が
解き明かされる

やがて天皇巡幸など国家行事参加者への服装規定として、フロックコートが定着していく。西洋の慣習や流行を無視した、日本独自の男子の礼装である。

一方、国は一般女性には何も制定しなかった。華族や上中級官吏の女性には婦人服制を定めたものの、宮中の女官と皇族女性のみ順守されるにいたる。一般の女性は、洋装の皇族に遠慮するような形で自主規制をおこない、横並びの「白襟・紋付き」の着物に落ち着いていく。

男性は「上」からの指令に従う形で、女性は「上」に忖度するような形で。いずれにせよ「隣の同性社会」と横並びになるほうが夫婦の服装の調和よりも落ち着きを覚えるというメンタリティーは、150年近くたった今でもさほど変わっていないように見える。

（服飾史家）